

雨武主神社

第22号

発行 あきる野市教育委員会 東京都あきる野市二宮350 電話:042-558-1111 FAX:042-558-1560

あめ む しゅ じん じゃ 雨武主神社本殿

白井裕泰 (ものづくり大学教授)

はじめに

あきる野市を東西に流れる秋川の南岸段丘上に牛沼・雨間・切欠地区があるが、雨武主神社が鎮座する明神山だけが一際目立って緑の森に包まれている。神社入り口にある石鳥居の前に立つと、杉や松の木立の中に石畳の参道が真っ直ぐ延びている。薄暗い参道を進むと、急勾配の石階段が見えてくる(写真1)。数百段の階段は、一気に登り切ることが難しく、途中で一休みし、さらに登ると山頂に到達する。山頂にはそれほど広くはない境内があり、雨武主神社の拝殿・本殿覆屋・奥の院のほか八雲神社および稲荷神社・疱瘡神社などの末社や神楽殿がひっそりと建っている。



写真1 雨武主神社参道の石階段

この有様は、鎮守の森に相応しく、かつてこの山自体が信仰の対象であったことを想わせる。また実際に、秋川北岸に明神山を遥拝する遥拝鳥居および



写真2 雨武主神社 遥拝鳥居・社

社が残されている(写真2)。秋川北岸の雨間の人々は、この遥拝所から明神山をご神体として礼拝したのであろう(写真3)。



写真3 雨武主神社遥拝所から明神山をみる

このように雨武主神社の有様、すなわち信仰の形態、

神域の景観、社殿の構成、本殿の形式は、文化遺産としてきわめて質の高い価値を有しているといえよう。

ここでは雨武主神社本殿の創立沿革、建築年代、規模、構造形式、彫刻などについて述べ、その文化的価値を明らかにする。

ところで雨武主神社本殿の所在地および所有者は以下の通りである。

名称：雨武主神社本殿
所在地：あきる野市雨間1941番地
所有者：河野清亮（二宮神社宮司）
所有者住所：あきる野市二宮2325番地

1．創立沿革

創建年代は不明である。口碑によれば、天正年間（1573 - 92年）北条氏直の家臣石川土佐守所領のとき、社領若干を差し置かれたといわれる。

江戸時代は雨武主大明神と呼ばれ、別当は村内の天台宗円通寺末西光寺であった。社地は秋川より南の明神山にあり、『新編武蔵風土記稿』によれば、「除地一町一段五畝廿四歩向雨間ノ山上ニアリ二間二三間ノ社ナリ」とある。旧社の位置は山麓にあったが、寛永16年（1639）の再建棟札があることから、あるいはこの時期に山上に遷座されたかもしれない。

明治2年（1869）10月、社号を雨武主神社と改めた。旧来雨間および高月村切欠の鎮守であったが、明治維新の際、切欠は氏子を離れ、ただ信徒として崇拝することになった。明治6年（1873）村社に列格された。

雨武主神社の祭神は、天御中主命（あめのみなかぬしのみこと）・速須佐之男命（はやすさのおのみこと）・品陀別命（ほんだわけのみこと）・大気都比売命（おおげつひめのみこと）（相殿）・宇祁毛智命（うけもちのみこと）であり、『武蔵名勝図会』によれば、神体は衣冠の木立像といわれ、おそらく奥社に安置されているのであろう。

2．建築年代

寛永16年（1639）の棟札があるが、現在の本殿は、弘化3年（1846）の「社殿普請仕用帳」によると、97両3分を投じて、嘉永2年（1849）に386代目飛騨内匠の後藤三次郎らによって造られたことが

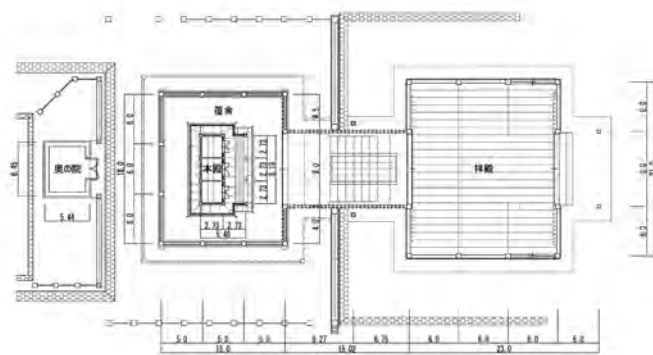
わかる。

また明治42年（1909）に覆舎を新築し、従来の覆舎は改造して拝殿とした。

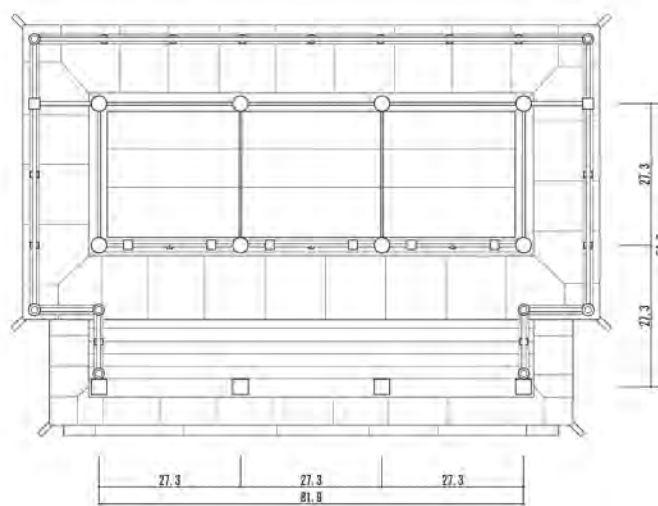
3．規模

本殿の規模は以下の通りである。

桁行柱間：8.19尺（2.482m）
正面中間：2.73尺（0.827m）
脇間：2.73尺（0.827m）
梁行柱間：2.73尺（0.827m）
身舎柱・向拝柱間：2.73尺（0.827m）
建築面積：1.242坪（4.098坪）



図版1 雨武主神社 拝殿・本殿・奥の院平面図



図版2 雨武主神社 本殿平面図

4．構造形式

概要：三間社・^{さんけんしゃ}流造、^{ながれづくり}千鳥破風・^{はふ}軒唐破風付、^{から}瓦棒板葺、^{けやき}総檜造。



写真4 雨武主神社本殿 正面



写真5 雨武主神社本殿 正側面

擬宝珠高欄切目縁を四周にまわし、左右奥に脇障子^{しやうじ}を建て、正面に五段の木階を設ける。身舎柱はすべて丸柱で、木製基壇の上に建てられ、地長押・腰長押・内法長押・頭貫獅子鼻付で固められ、出組を載せ、丸桁・妻梁を支持する。軒回りは二軒・繁垂木・茅負・二重裏甲からなっている。妻飾は二重虹梁・鬼板で化粧棟木を支える。向拝は三間で、浜縁を設ける。向拝柱は角柱几帳面取りで、水引虹梁獅子鼻（正面）・猿鼻（側面）付で連結され、三ツ斗を載せ、軒桁を支える。屋根は流造、千鳥破風・軒唐破風付で、箱棟両端に鬼板・千木付を設け、大棟に4本の鯉木を載せる。千鳥破風大棟先端に鬼板・千木・鯉木を設ける。降り棟、軒唐破風大棟先端に鬼板を設ける。

5. 彫刻

地紋彫：木製基壇土台・葛、地長押、腰長押、内法長押、台輪、軒桁、差桁、菖蒲桁、縁

束、高欄地覆・平桁、脇障子柱、笠木、浜縁土台・束・縁葛、木階ささら桁、破風拝み部、千鳥破風拝み部に花菱文が彫られている。また身舎柱には菊文、向拝柱には亀甲花文が彫られ、縁持送には雲文、二重肘木には雲水文が彫られている。

羽目板彫：木製基壇羽目板に菊水文（背面両脇間および左側面には亀が付加）、縁支輪に菊文、浜縁羽目板に菊水文（正面）および牡丹文（側面）、小脇板には中間に昇竜、脇間に昇鯉、右側面壁に「林和靖、梅と鶴を愛する図」、背面右脇間壁に「白楽天、詩を老婆に聴かせる図」、背面中間壁に「西王母、仙桃を与える図」、背面左脇間壁に「侍童が、滝の水を瓢箪に汲んで老人にすすめている図」、左側面壁に「虎と、瓢箪を持った侍童をつれた隠士・仙人の図」、脇障子羽目板の表側に恵比寿、裏面に松竹梅と玄武、琵琶板に雲文、支輪に雲文、向拝妻虹梁上に人面と松が彫られている。



写真6 「林和靖、梅と鶴を愛する図」（右側面）



写真7 「白楽天、詩を老婆に聴かせる図」（背面右）



写真8「西王母、仙桃を与える図」(背面中央)



写真9「侍童が、滝の水を瓢箪に汲んで老人にすすめている図」(背面左)



写真10「虎と、瓢箪を持った侍童をつれた隠士・仙人の図」(左側面)

丸 彫：身舎木鼻に獅子、向拝木鼻に獅子(正面)および猿(側面)、向拝両脇間中備えに梅と鶯、手挟みに牡丹、繋ぎ虹梁に雲水が彫られている。

陰 刻：向拝両脇間水引虹梁および妻虹梁に渦文若葉、実肘木に渦文が彫られている。

陽 刻：向拝中間水引虹梁に葡萄、向拝軒唐破風虹梁および唐破風に雲様渦、妻二重虹梁に雲が彫られている。

おわりに

雨武主神社本殿は森厳な鎮守の森に覆われた山頂に祀られ、特に参道の景観が優れている。本殿は嘉永2年(1849)に飛騨内匠の後藤三次郎らによって建築されたことが「社殿普請仕用帳」(弘化3・1846年)によって明らかであり、三間社・流造、千鳥破風・軒唐破風付、瓦棒板葺、総檜造で、全体に彫刻が施された豪華な社殿である。

また本殿は、当初から覆舎がかかっていたので、保存状態は良好である。

このように雨武主神社本殿は、幕末期を代表する、極めて文化財的価値の高い建築であるといえよう。

【参考文献】

- 『新編武蔵風土記稿』間宮士信ほか(文化7・1810年～文政11・1828年)
- 『武蔵名勝図会』植田孟縉(文政3・1820年)
- 「社殿普請仕用帳」(弘化3・1846年)
- 「雨武主神社明細帳」(明治33年・1900年)
- 『わがふるさと秋川市郷土抄史』(昭和57・1982年)
- 『西多摩神社誌』東京都神社庁西多摩支部(昭和58・1983年)